



インターネット版 第7号（総第14号）

2007 September

## 目次 contents

- 就任のご挨拶 〈図書館〉は異世界への「魔法の絨毯」  
附属図書館長 谷川 道子
- 寄稿 エスケービズム  
「現実逃避」のすすめ 大英博物館にて  
学長(前附属図書館長) 亀山 郁夫
- 特集 附属図書館利用状況アンケートの結果について
- 寄稿 研究資料と大学図書館 本学准教授 若松 邦弘
- 貴重書紹介 「19・20世紀フランス語貴重書簡：スタンダール、サンド、  
フローベール、チャイコフスキー、サルトル」展示に寄せて  
本学准教授 博多かおる
- 図書館からのお知らせ  
図書館講演会、貴重書展示会開催のお知らせ
- 図書館活動日誌（平成19年4月～9月）
- 図書館統計（平成19年3月～8月）
- 編集後記

## 〈図書館〉は異世界への「魔法の絨毯」―附属図書館長への就任にあたって

附属図書館長 谷川 道子

〈図書館〉には誰しもさまざまな思いや思い出があり、世代や時空によってその様相は異なっている、それはいつも、ドキドキ・ワクワク感に裏打ちされているのではないだろうか。亀山郁夫前館長から図書館長職を引き継ぐことになって、〈図書館〉というものにあれこれ思いをめぐらしていると、さまざまなことが思い出されてくる。いわば我が〈ヴィタ・ビブリオテカリス〉。

私の最初の図書館は、紙芝居屋さん、貸し本屋、そして移動図書館だった。母に連れていかれたり、たまには小銭を握り締めて背伸びをして覗きこんだりしながら、自分の知らない世界がそこから広がっていく予感にときめいた。

入学してからは学校の図書館が異世界への公認の入り口になる。どの本を手にしようが選り取り見取り、しかも無料！ 中学校からは図書館の常連の本の虫。何せトルストイやドストエフスキーを開くと19世紀のロシアの世界に連れて行って貰えるし、スタンダールやロマン・ロランの小説はフランスの18～19世紀の男と女の物語を垣間見させてくれ、ゲーテやハイネは19世紀のドイツと…居ながらにしてはるかな時空に飛翔させてくれる魔法の絨毯に乗るようなもの。学校の行き帰りの道で歩きながら読むほど夢中になったり、発禁をめぐって裁判沙汰になったとかいう『チャタレイ夫人の恋人』をこっそり借りてきて隠れて読んだり、本なら未成年でも悪場所を訪れたって逮捕はされないのだし、読みようでは学校の図書館にもそんなときどきするような大人の本はいくらもあったし、受験勉強の傍らそれやこれやを次々と読み漁っていた。当時はまだTVもアニメも漫画もほとんどなく、本が何より想

像力の翼を広げてくれる異空間へのいわば入場切符だった。あの頃の方がファンタジーの世界は豊かだったのかもしれない。

高校生になると次第に外国翻訳文学から日本近代文学に関心が移ってきて、興味が世界から自分の内面やアイデンティティに移っていく時期だったのだろう。大学に入ったら日本近代文学を勉強しようと思うようになっていた。

だが60年代後半の頃の大学はベトナム反戦に始まる政治の季節、やはりまた世界に目が向かうとともに、これまで自分は文学書しか殆んど読んでこなかったことにあらためて気づかされ、目覚めたように歴史や思想や哲学などの書物も読み始めた。学問の分野には人文科学や社会科学、自然科学など多様にあり、それらは互いに関連しあっていて、どの世界も根っこで通底しあっている。さて私は何をどう勉強しよう…それを考えることから〈研究〉への興味が拓かれていって、ここからはまた違う形での大学での図書館通いが始まっていった。

いまの若い世代の〈ヴィタ・ビブリオテカリス〉はどんな相貌を呈するのだろうか。図書館をめぐる様相も大きく様変わりした。いつでもどこでもインターネットに接続可能で何でも情報が得られる「ユビキタスネットワーク社会」といわれ、本学の図書館はそのシンボリック存在だ。でも、その遍在する知をキャッチするアンテナは何より自分の関心と好奇心であり、それを形成するのが我が〈ヴィタ・ビブリオテカリス〉。源はやはりドキドキワクワクの出会いの読書体験なのではないだろうか。さあ、我々が誇る図書館で、あなたの〈ヴィタ・ビブリオテカリス〉を！

学長（前附属図書館長） 亀山 郁夫

けっして遠い記憶ではない。

いつの頃からか、博物館通いを愛するようになった。<sup>エスケープイズム</sup>現実逃避、いや、老いのしるしなのかと疑ってみたが、この夏、イギリスに旅をして考えを少し改めた。5年ぶりに訪れる大英博物館での小さな経験をつづる。

ロシア文学と長くつきあってきた私にとって、大英博物館というと、なにより神秘主義の魔窟のイメージである。というと、いささか大げさに聞こえようが、じつは、19世紀末の哲学者ウラジーミル・ソロヴィヨフが、『黙示録』に予言された「永遠の女性」と二度目に会う場所がここなのだ。死の直前、彼はその経験を「三度の邂逅<sup>かいこう</sup>」という長い詩に著し、後世の象徴派詩人たちに絶大な影響を与えた。時は、1874年、この博物館の一室で、グノーシス主義の文献を閲覧しているときに「邂逅」は起こった。「永遠の女性」ソフィアは、そのとき顔<sup>かんばんせ</sup>のみの姿で出現し、エジプト行きを哲学者に啓示した……

と、ここまで書いて、大英博物館とエジプトの歴史的な結びつきについて、これまでとくに強い関心を抱いたことがなかったことに気づいた。大英帝国が金にあかして買い集めた展示品ぐらいにしか考えていなかったのだ。数年前、日本でも《大英博物館展》が話題となり、ミイラの展示に人気集中した、という記事を聞いたときも特別に感慨は沸かなかった。ところが、である。今回、改めて、古代エジプトの展示室（上階 60 番台）を訪れ、なぜかひじょうに強いショックを受けてしまった。理由はわからない。紀元前 5000

年というから、じつに 7000 年の時の風化に耐えて原型をとどめている人体の凄み、とでもいおうか。展示室の品々に、私はなぜか奇妙な嫉妬まで覚えてしまったのである。

驚いたことがもう一つあった。古代エジプトの展示室に集まってくる若者たちの姿である。なかに一人、精妙な手つきで一点一点をデジカメに収めている日本人がいた。なぜ、と思ったが、答えは見つからなかった。私はいつしか、なくもがなの一人思いにはまり込んでいたらしい。そうか、これが、グローバリゼーションなのか！ 若者はもう行き着く先を失ってしまってここに来た。現実には、金と暇さえあれば、どこにでも行ける時代になったが、決して行き着くことのできない場所も確実にある。それが過去の時間だ。そこに行くには、想像力と知識に頼るほかない。だからいま、こぞって、はるか彼方の歴史にロマンを求めるのだ。それを、現実逃避と呼ぶ人もいるだろうけれど、かまわない。現実逃避こそは人生で最高の生きる喜びなのだから。いや、知的快楽を、夢を失ってしまったら、人間は何によって生きられるというのか。

思わず、英国万歳！と、声を上げたくなった。地下鉄の初乗り £ 4（約 1000 円）という、いやな現実はあるけれど、そこはバスを利用すればどうにでもなる。大英博物館も、ナショナル・ギャラリーも入場は無料。いつでも、「現実逃避」の快楽を味わえる仕組みである。もちろん、知的好奇心が先にあっての話だが、そのまえに多少とも脚力は鍛えておく必要がありそうだ。

## 附属図書館利用状況アンケートの結果について（報告）

### 附属図書館

附属図書館では、自己評価の一環として、平成18年12月12日～12月14日の3日間、「附属図書館利用状況アンケート」を実施しました。本調査は、来館者に対して調査票を配布・回収する方法を採り、900枚を配布し、466枚の回答を得ました。ご協力ありがとうございました。集計は、p.5をご覧ください。

#### 1. 集計結果の概要

##### (1) 基礎情報

回答者の男女比率は、本学学生のそれとほぼ同様です。回答者の所属において、教員及びその他（職員等）が含まれていますが、その割合は小さく、ほぼ学生・大学院生の利用実態が反映されていると考えられます。

##### (2) 利用頻度・利用目的

利用頻度の高い者（「ほとんど毎日」及び「週に2～3回」）が、85%を超えており、非常に良く利用されていると判断できます。利用目的として、「PC」（48.7%）が「図書や雑誌」（46.4%）や「自習スペース」（53.8%）と同程度となっているのは、図書館が従来型の「図書館資料」だけでなく、インターネット上の情報資源へのアクセス窓口となっていることを示していると考えられます。

##### (3) 満足度

「総合評価」において、「ふつう」・「やや満足」・「満足」としている回答者が、

80%を超えている点は、利用頻度の高さと考えあわせると、学生等に対して十分な学習環境を提供していると考えられます。個別の項目を見ると、「やや不満」・「不満」の比率が高いものとして、「蔵書数」（43.8%）、「開館日・開館時間」（38.2%）があげられます。「総合評価」での「満足」・「やや満足」との相関関係においては、「蔵書数」における「やや不満」・「不満」が最も高くなっており、改善度が高いことを示しています。「資料の配架・配置」、「館内の案内・掲示」、「貸出期間」については、「ふつう」・「やや満足」・「満足」との回答者が80%を超えており、現状で相当程度の満足度が得られていると考えられます。

#### 2. 今後の利用者サービスについて

集計結果を踏まえて、今後も附属図書館はさらに充実した利用者サービスを展開していきたいと考えています。

特に、現在の高い利用頻度を維持又は増加させるように努めていきます。そのために、館内の環境整備（空調・照明・閲覧室）等の施設の維持・保全および安全性の確保を継続して実施します。平成18年度には、閲覧席の照度不足改善のために、閲覧席の配置変更と照明増設の対策を実施しました。その他のご質問・ご要望については、p.6をご覧ください。

附属図書館利用状況アンケート2006

- (1) 実施期間：平成18年12月12日(火)～12月14日(木)  
 (2) 実施方法：図書館入館者への調査票配布及び回収  
 (3) 回収状況：回収調査票466枚/配布900枚 回収率 51.8%

性別	1.女性	2.男性	計
	289	140	429
	67.4%	32.6%	100.0%

所属	1.学部生 (1, 2年)	2.学部生 (3, 4年)	3.大学院生 (前期)	4.大学院生 (後期)	5.留日セ 学生	6.教員	7.その他	計
	156	191	39	13	17	3	10	429
	36.4%	44.5%	9.1%	3.0%	4.0%	0.7%	2.3%	100.0%

利用頻度	1.ほとんど 毎日	2.週に2～3 回	3.月に数回	4.試験期間 のみ	5.利用しな い	計
	127	239	60	3	0	429
	29.6%	55.7%	14.0%	0.7%	0.0%	100.0%

利用目的 *複数回答可	1.図書や雑誌	2.PC	3.自習スペース(含グルー プ学習室)
	199	209	231
	46.4%	48.7%	53.8%

	5.満足	4.やや満足	3.ふつう (どちらとも 言えない)	2.やや不満	1.不満	計
総合評価	35	146	165	69	14	429
	8.2%	34.0%	38.5%	16.1%	3.3%	
	80.7%			19.3%		100.0%
蔵書数	37	76	128	119	69	429
	8.6%	17.7%	29.8%	27.7%	16.1%	
	56.2%			43.8%		100.0%
資料の配架・配 置	73	106	210	31	9	429
	17.0%	24.7%	49.0%	7.2%	2.1%	
	90.7%			9.3%		
館内の案内・掲 示	64	89	210	52	14	429
	14.9%	20.7%	49.0%	12.1%	3.3%	
	84.6%			15.4%		100.0%
PC・コピー機の 数	82	93	135	92	27	429
	19.1%	21.7%	31.5%	21.4%	6.3%	
	72.3%			27.7%		100.0%
自習スペース	81	108	120	83	37	429
	18.9%	25.2%	28.0%	19.3%	8.6%	
	72.0%			28.0%		100.0%
蔵書検索OPAC の使い勝手	65	85	183	72	24	429
	15.2%	19.8%	42.7%	16.8%	5.6%	
	77.6%			22.4%		100.0%
開館日・開館時 間	56	106	103	107	57	429
	13.1%	24.7%	24.0%	24.9%	13.3%	
	61.8%			38.2%		100.0%
貸出期間と冊数	109	114	164	29	13	429
	25.4%	26.6%	38.2%	6.8%	3.0%	
	90.2%			9.8%		100.0%
職員のサービス	75	82	195	57	20	429
	17.5%	19.1%	45.5%	13.3%	4.7%	
	82.1%			17.9%		100.0%



## 皆様からいただいた主なご要望と図書館からの回答

### 【1. 蔵書について】

① 蔵書数が少なく、古い。

＜回答＞図書館では毎年約2万冊（うち、和書は6千冊）を新着図書として受入しています。なお、月毎の新着図書はOPACの「新着図書検索」で確認できますのでご覧ください。

②ベストセラーや小説など一般的な書籍も置いてほしい。

＜回答＞図書館は本学の教育・研究に役立つ資料を広く収集・提供することを第一義としています。近隣の市町村の図書館も活用していただき、日々の学習・教養に図書館を役立ててください。

③社会科学系の図書が少なすぎる。

＜回答＞時代とともに大学の性格も少しずつ変わっているようです。図書館は今後も本学の教育・研究の内容を反映するようバランスの良い蔵書構築に努めていきます。

④雑誌をもっと増やしてほしい。

＜回答＞図書館では、国内雑誌、外国雑誌ともに学術雑誌の継続購読を主としており、一般誌を含む多くの雑誌を購読することは予算の面からも難しい状況です。国内刊行の一般誌については、近隣の市町村の図書館をご利用ください。外国雑誌については、冊子体を購読していないタイトルでも、電子ジャーナルでは閲覧できるものもありますので、併せてご利用ください。

### 【2. 資料の配置・配架について】

⑤同じ言語の資料が別々の階にわかれているので不便。

＜回答＞本学は複数の言語を学ぶ方が多いことから、言語と文学に関する図書を同じ階に配置することを優先しています。書架に行く前に蔵書検索システム（OPAC）等にて、ご自分の利用したい、もしくは興味のある資料の配置場所をご確認いただくことをお勧めします。

### 【3. 館内の案内・掲示について】

⑥資料の配置図がわかりづらい。

＜回答＞詳細に記載したいところですが紙面の関係により現在の状態になっています。わかりにくい場所につきましては、2階カウンターまでお問い合わせください。ご説明やご案内等で対応しております。

### 【4. PC・コピー機について】

⑦図書館の資料のみコピー可というのはよくわからない。

＜回答＞館内のコピー機は本図書館の資料を複写する方の便宜をはかるために設置しています。自作レジュメ等の複写は、目的外使用になるほか、本来の目的で使用を希望する方が複写できないことになりかねません。

館内設置のセルフコピー機を使用して行う複写は著作権法を始めとする関係法令のほか、権利者団体等との取り決めにより可能となっている特別な行為です。取り決めの中には、いろいろな条件がありますが、関係する部分をまとめると以下の2点になります。

1. セルフコピー機を使用する利用者が法を遵守することを明示すること

2. 利用者が適切に複写しているかどうか

職員が常時確認できる体制であること

これらの条件に従い、複写をする方には文献複写申込書及び誓約書への記入をお願いし、職員が必要に応じて使用中の方に声をおかけしています。利用者の方々が適切に著作権法を遵守して複写しているかどうかを確認する点からも本図書館の資料以外の複写をお断りしています。

ご理解いただくとともに著作権法を遵守した資料の利用をお願いします。

⑧コピー機を2階のみでなく、各階に増やしてほしい。

＜回答＞上述のとおり、職員の目の届く位置にコピー機を設置する必要がありますので、他の階に増設はできません。設置している趣旨及び複写条件をご理解いただき、ご了承ください。

⑨プリントアウトできるPCの数が少ない。

＜回答＞現時点で、プリントアウト用PCの台数は増やしません、プリントアウト用PCの一人当たりの占有時間を短くする工夫によって、実質的にプリント回数を増やす変更を行う予定です。

【5. 自習スペースについて】

⑩自習スペースをもっと増やしてほしい。

＜回答＞自由閲覧席、グループ閲覧室、個室閲覧室等があり、閲覧席が約570席あります。試験期間には、机・席が不十分と思われることもあるかもしれません。ただし、荷物の放置による机の長時間占有なども見かけられます。限られたスペースですので、多くの方が利用できるようにご協力をお願いします。

【6. 蔵書検索 OPAC について】

⑪OPACで雑誌の検索ができるようにしてほしい。

＜回答＞2007年度より日本語雑誌と大学紀要のOPAC検索が可能になりました。今後は順次、朝鮮語雑誌、中国語雑誌、その他の外国雑誌というような段階的な検索サービス提供を計画しています。いましばらく時間を頂くこととなりますが、鋭意努力していきますので、ご理解くださるようお願いいたします。

【7. 開館日・開館時間について】

⑫日曜日、祝日、月末休館日も開館してほしい。また、土曜日の開館時間を延長してほしい。

＜回答＞図書館では、従来から、夜間開館の延長(20時から21時45分へ)及び土曜日開館と、順次開館日及び開館時間を拡大してきました。さらに開館日・開館時間を拡大するためには、人員・経費の確保、提供サービスの制限、安全性の確保等の課題があり、早急な対応は困難です。今回のアンケート結果、利用実態を踏まえて、継続的に検討してまいります。

⑬夏季休暇、冬季休暇中の開館日が少なすぎる。

＜回答＞夏季休業中に2週間程度休館し、その間に図書の不明本の調査・搜索(蔵書点検)を実施しています。本作業は貸出・返却を一時休止して行う必要があるため、やむを得ず休館としております。この間も、図書館職員は、同作業のほか、通常業務を行っております。また、平成18年度からは8月中旬に夏季一斉休業(3日間)が導入され休館日が増

えておりますが、これは全学一斉として実施されるものです。冬季休業中は、定められた年末・年始の休日とその前後を休館としておりますが、休業期間中の土曜日を臨時開館しておりますので、開館カレンダーを事前に確認の上、ご利用ください。

⑭朝1時限の授業前に開館してほしい。

＜回答＞8時30分から9時の間には、当日の開館準備（ブックポスト返却本処理、予約図書処理等）を行っています。円滑な利用のための準備時間となっておりますので、ご理解ください。

#### 【8. 貸出期間について】

⑮貸出期間をもう少し長くしてほしい。

＜回答＞収容能力や費用等の問題があり、同じ資料を利用したい人数分そろえることができない中で、借りている方と利用したい方の双方の利便性を考慮して現在の設定になっています。なお、従来は資料を図書館にお持ちいただいた上でしか貸出期間の延長ができず、ご不便をおかけしておりましたが、平成19年度よりインターネットを経由して貸出期間を延長できるサービスを開始しました。ご利用ください。

#### 【9. 職員のサービスについて】

⑯カウンター職員の対応が悪い。

＜回答＞丁寧に対応するように心がけていますが、不快に感じる点については申し訳ありません。ただ、カウンターが混雑している場合には十分な説明や案内ができないこともあります。また、ルール違反の方への注意喚起については、内容上、強い口調になりがちに

なることについては、事情をご理解いただいてご容赦いただけたらと思います。

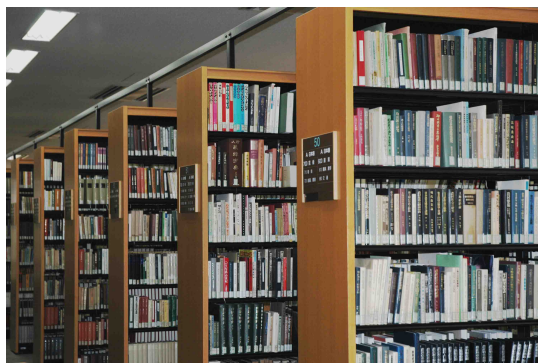
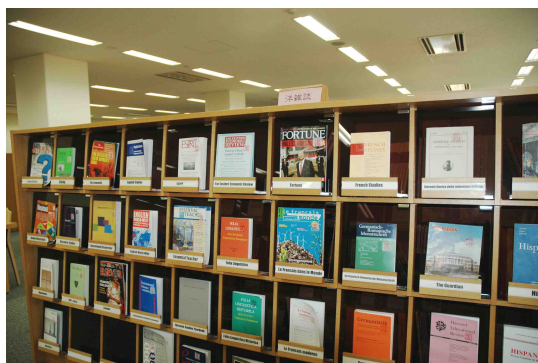
#### 【10. 環境について】

⑰飲食できるスペースがほしい。ペットボトルは持ち込み可にしてほしい。

＜回答＞図書館の建物および机や椅子などは今後、数十年間、図書については半永久的に利用され続けますので、汚損等の危険を避けるため全館を飲食禁止としています。数十年後、利用される後輩の方々のために、できるだけ綺麗な施設および資料を提供できるようにご協力いただきたいと考えています。

⑱ロッカーをまた使えるようにしてほしい。

＜回答＞閉鎖したいちばんの理由は占有による私物化が著しかったことにありますが、旧来の鍵式では、再び私物化される可能性が高いため、私物化しにくい構造のロッカーの購入や運用について検討しているところです。





本学外国語学部准教授 若松 邦弘

この原稿の依頼を受けてあらためて考えると、最近、本学の図書館に限らず大学の図書館を利用することがあまりないことに思い至った。単行本やジャーナルを閲覧に供するという図書館の機能が、こと研究という目的とは、かみ合わなくなっているのである。

研究分野により事情は異なろう。以前同僚であった経済学者の場合、研究室の書架は半分以上が空であった。データも研究成果の公開もオンラインが多く、単行本という形態はほぼ教科書や啓蒙書に限られているのである。これに対し、図書そのものが研究の一次資料として重要な分野では、図書館の果たす役割が今も大きいのではないかと推測する。

筆者の分野（政治学）でも、単行本が一次資料となることは少ない（ただし政治史や政治哲学は単行本を多く用いるかもしれない）。図書館が収集してきた単行本やジャーナル類は、研究動向を把握するための二次資料にすぎない（しかもこれらは常時手元になければ不便である）。よく用いるのは、議会や政府の刊行物、各種団体の刊行物や業界紙などである。このうち、議会や政府の刊行物は、新しいものであればネットでの閲覧が可能であり、紙媒体でも日本のものなら東京近辺で比較的容易に見ることができる。比較対象としてイギリスの資料を用いることもあるが、これらもある程度は国立国会図書館などで閲覧できる。

これに対し、各種団体の刊行物や業界紙等を閲覧しようと思うと、日本のものでさえ、特定分野を除きたいへん困難である。そのよ

うな資料を重点的に集めている図書館や研究室がほとんどないのである。このあたりの事情はイギリスの場合、やや異なる。特定分野についての資料を集中的に集めている場所が、国内のどこかに存在する可能性が高い。それらは「リソースセンター」と呼ばれ、研究機関や大学の研究室がそれぞれに持つ資料室がそれに当たる。当該分野の単行本やジャーナルのみならず、各種団体の資料や業界紙、さらに一般紙の切抜きなどが所蔵されている。

そのような資料室に筆者が初めて接したのは、イギリス留学中のことであった。その研究室も、当該分野ではきわめて充実したコレクションを備えていた。日本と同じ程度の大きさの研究室を三部屋ほどつなげただけの、お世辞にもきれいとはいえないそのスペースを、留学当初は全く気に留めていなかった。しかし、研究が進むにつれ、その価値が大変なものであることを知ることとなった。狭いながらも、書架にびっしりとパンフレット類が並ぶその場所から、ヨーロッパの学会をリードする研究が発信されているかと思うと、不思議な気がしたものである。

日本でも、特殊法人や NPO、財団法人などにそのような資料室を持つところがあるものの、残念ながら大学にはあまり普及していない。図書や雑誌としてはいわば「規格外」の刊行物が中心となるが、まさにそれゆえに、体系的な収集は大学でしか行えない。ISBN や ISSN のないものも多い、このような一次資料の収集が容易になることを願ってやまない。

「19・20世紀フランス語貴重書簡：スタンダール、サンド、フローベール、  
チャイコフスキー、サルトル」展示に寄せて

本学外国語学部准教授 博多 かおる

本学図書館に所蔵されている貴重なフランス語自筆書簡を間近に読める機会がやってくる。手紙の書き手は19世紀の小説家スタンダール、ジョルジュ・サンド、フローベール、ロシア人音楽家チャイコフスキー、そして20世紀フランスの哲学者サルトルの5人。いずれも近現代芸術・思想の偉大な担い手たちであることは言うまでもなく、文面からは彼らの人生の一コマ、当時の社会状況などが生き生きと蘇ってくる。

時代を追って手紙とその書き手を見てみよう。フランス近代小説創始者の一人とされる小説家スタンダール（1783-1842、本名アンリ・ベール）の手紙は、彼が傑作『赤と黒』（1830年刊）[A/909/509744/6]や『パルムの僧院』（1839年刊）[A/909/20/27]を世に出す前、ある劇的な状況で書かれたものだ。グルノーブルに生まれたスタンダールは、理工科学校入学を名目にパリに上り、ナポレオン軍に加わって17歳でミラノを訪れ、自由と情熱の国イタリアに魅せられた。1810年国務院書記に任命され、1812年にはロシア遠征中の皇帝に親書を届ける役目を授かってモスクワに赴き、モスクワ炎上を目撃している。それに続くナポレオン軍のロシアからの退却は悲惨を極めた。今回展示される書簡は、退却の道中、スタンダールが備蓄用食料調達総指揮官として兵士に食料を供給したスモレンスクあたりで書かれたらしい。手紙は幼友達フェリックス・フォールに宛てられ、「シャブラン」という偽名で署名されている。暗号のように簡素な文面が、いかに多くを語っていることか。退却の混乱と食糧の欠如、極限状態でも

作家としての本能から人間を観察する自分。その気力も蝕む兵士達の醜態。予期せぬ危機に直面させられたこの旅で、『イタリア絵画史』（1817年刊）[A/9N-8/S825-1/9]の原稿を紛失し、『ルテリエ』の草稿を最後まで抱えたまま、スタンダールはかろうじてパリに生還した。

約20年後の1833年、50歳のスタンダールはパリでの休暇を終えフランス領事として任地チヴィタヴェッキアに戻る途中で、ヴェネチアに向かうジョルジュ・サンドとアルフレッド・ミュッセに出会う。酔ってダンスのステップを踏むスタンダールは、残念ながらサンドの目には「不格好な」人物に映ったようである。ジョルジュ・サンド（1804-1876、本名オーロール・デュパン）について、18歳で結婚した夫との離婚、詩人ミュッセ、音楽家ショパンらとの恋の遍歴、男装など三面記事的な世間の関心は絶えなかった。だがサンドは作家の社会的使命を強く意識し、ペンをもって社会の不公平、宗教の偏狭さ、政治制度の不備などと闘い、71歳で亡くなる直前まで多彩な作品を書き続けた。結婚制度を疑問に付した初期の『アンディアナ』（1832年刊）、放浪の女性歌手を主人公とした名作『コンシュエロ』（1842年刊）、ピエール・ルルーの共和主義的平等思想の影響および神秘主義的傾向を感じさせる『スピリディオン』（1839年刊）[A/9N-8/S213-3/2]、少女時代を過ごしたフランス中部ベリー地方の風習を描き込んだ田園小説群（『魔の沼』（1846年）[A/9N-8/S213-3/6]『愛の妖精』（1849年）[文庫/13/535-1]等）。社会の理想を問い続けたこ

これらの作品は、フランス内外の作家に影響を与えた。サンドが作家・芸術家・政治家・俳優らと交わした3万通以上の書簡もまた、当時の芸術・社会的状況を知るために不可欠な資料と見なされている。今回展示される手紙は彼女が62歳の時に書かれたものだ。サンドは生涯愛し続けたベリー地方の表現を引用して体の不調を表現し、ノアンの自宅に立ち寄ってくれるよう相手に説いている。ノアンの館の女主人として芸術家や友人を招き人々と交流を重ねてきたサンドの晩年の姿を想像されたい。

この手紙の前年、サンドは重要な文通相手になりつつあったフローベール(1821-1880)が暮らすノルマンディーのクロワッセの家に二度滞在し、文学や人生の諸問題について語り合ったのだった。宗教と良俗に反する作品として告訴された『ボヴァリー夫人』(1857年刊)[A/909/509744/7]、二月革命後の社会における若者の夢の挫折を醒めた文体で描いた『感情教育』(1869年刊)[A/909/30/9]等、フローベールの作品はリアリズムのレッテルを大きく越え、現代文学を導く要素 — 作者の主観の排除、言葉の自立性など — をはらんでいた。適切な表現を求めて一文一文に苦悶したフローベール、時に冗長な文体も見られるが多作だったサンド、この点では正反対の彼らが熱心に文通し合ったことは興味深くないだろうか。彼らの文通は『往復書簡サンド＝フロベール』[A/9N-5/530903]で読むことができる。今回展示される1875年の手紙でフローベールは、姪カロリーヌの夫エルネスト・コマンヴィルの危機的な経済状態に際し、友人に助力を求めている。クロワッセが姪の財産の一部だったので、フローベールは大切

な執筆と生活の場所を失う危機に晒されていた。結局、コマンヴィルは破産を免れることになるが、フローベールの作家活動も経済状態もこの一件から大きな打撃を被ったのである。

同時代、母方にフランス人の曾祖父を持つロシア人作曲家チャイコフスキー(1840-1893)はよくパリを訪れ、この町に特別な思いを抱いていたようである。現在広く知られている彼のピアノ協奏曲第一番(1875年ボストンで初演)は、フランスでは1878年のパリ万国博覧会で初演された。書簡は、序曲『嵐』等の自作をパリで指揮した演奏会について、チャイコフスキー自身が興奮冷めやらぬ口調で語っている貴重な記録だ。コロヌ夫人の名が挙がっているが、フランスの指揮者コロヌ(1838-1910)はオデオン座、続いてシャトレ劇場を本拠地とするオーケストラを組織し、20世紀初頭には管弦楽の録音にも先駆的に取り組んだ人物である。彼は1879年にパリでチャイコフスキー作品を演奏し、10年後にはこの作曲家に楽団の指揮を任せて代わりにロシアに招かれている。

さらに時代は下り、20世紀中盤に多方面にわたる創作活動と社会・政治的行動を通じて多大な思想的影響を及ぼしたジャン・ポール・サルトル(1905-1980)の手紙にたどり着く。彼の有名な哲学著作には『存在と無』(1943年)[A/9N-8/S251/18-20]、小説には『嘔吐』(1938年)[A/9N-8/S251/6]などがあるが、晩年の重要な仕事の一つはフローベール論『家の馬鹿息子』(1971・72年に1-3巻刊、4巻は未完)[A/9N-4/173/1-3]だった。書簡はイタリア旅行の途中、ワンダ・コサキエヴィッチに宛てて書かれたものだろう。ロ

シア系姉妹の姉オルガがボーヴォワール、サルトルと親密な関係にあったなら、妹ワンダもサルトルの恋人となり、マリー・オリヴィエの名でサルトルの戯曲『汚れた手』[A/909/30/47]のジェシカ役などを演じた。彼女に語りかけるサルトルの調子は軽快で、19世紀に流行した「旅行記」というジャンルを引き合いに出し（スタンダールがイタリアについて『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』[A/9N-8/S825-4]を書いていることを思い出そう）、イタリアで見たものを報告しながら、「イタリアについて語ること」についても語っている。古い建造物の見方、絵はがき、バスのトイレなどについての冗談めかし機知に富んだコメントに思わず引き込まれる。受取人への思いで文体が沸き立ち、移動中の軽やかな思考を伝えるテキストとしての旅の手紙をそこに見ることもできるだろう。

スタンダールが墓碑に刻ませた「生きた、書いた、愛した」という言葉に違わず、作家や音楽家たちが作品を「書いた」だけでなく日々を「生き」、人を「愛した」存在だったことを書簡は証明している。もちろん、作品を

書いた著者と私生活を生きた人物は同じ位置から語るわけではない。作家たち自身、行動の痕跡を他者の解釈に委ね、すべてを混同されることを恐れていたのではないか。スタンダールは多数の（177に上るという）偽名を用い、手紙や日記に偽の日付や情報を書き込んで世間の目を眩まそうとし、チャイコフスキーは死後、第三者に手紙を読まれるという考えに震えた。フローベールはサンドに、クロワッセに来たことを語るなら別の地名を使ってくればありがたいと言っている。だが書かれたものは何であれ、いったん書き手の手を離れば予期せぬ運命に晒され、どのような目的に使われるかわからない。彼らの書簡を前にする私たちはまさにその事実立ち会っている。できれば作家たちの人生を断片的に覗き込むだけでなく、様々な作品を通して多面的に彼らの思考の揺れ動く瞬間に立ち会ってみたい。その時、貴重な書簡たちは、印刷された彼らの作品を包み込む図書館という空間に新たな次元を開いてくれることだろう。

【編集注】

- 文中書籍タイトル名の後の〔 〕内は、当館図書請求記号
- 本稿でご紹介しました書簡を、今秋開催する予定の「19・20世紀フランス語貴重書簡」展示会にて公開いたします。  
興味のある方は、是非、ご来館ください。  
詳細につきましては、次頁のお知らせにてご確認ください。



## ◆ 図書館講演会並びに貴重書展示会のお知らせ ◆

附属図書館では、平成12年度から公開講演会を図書館事業の一環として行っております。今年度は、作家の辻原登氏をお招きして、下記の要領で行います。また、併せて本誌10頁以降で紹介しました貴重書展示会も開催いたします。地域の方々をはじめ、どなたでも入場できますので、多数の皆様のご来場をお待ちしております。

### <講演会>

タイトル：『歴史と冒険、史実とフィクション、そのシンクロシティ』

講演者：辻原 登氏（つじはら のぼる 作家、第103回芥川賞・第50回読売文学賞[小説賞]・第36回谷崎潤一郎賞・第31回川端康成文学賞及び第33回大佛次郎賞を受賞）

日時：平成19年10月29日（月） 18時15分～19時45分

会場：東京外国語大学 研究講義棟2階 226教室（定員200名）

事前申込：不要 入場料：無料

### <貴重書展示会>

タイトル：『19・20世紀フランス語貴重書簡：スタンダール、サンド、フローベール、チャイコフスキー、サルトル』展示会

日時：平成19年10月29日（月）～11月22日（木）9時00分～21時45分

ただし、10/31、11/20～11/22は17時まで、また土曜日は9時30分～16時45分、

日曜日・祝日は休館

会場：東京外国語大学 附属図書館 2階展示コーナー

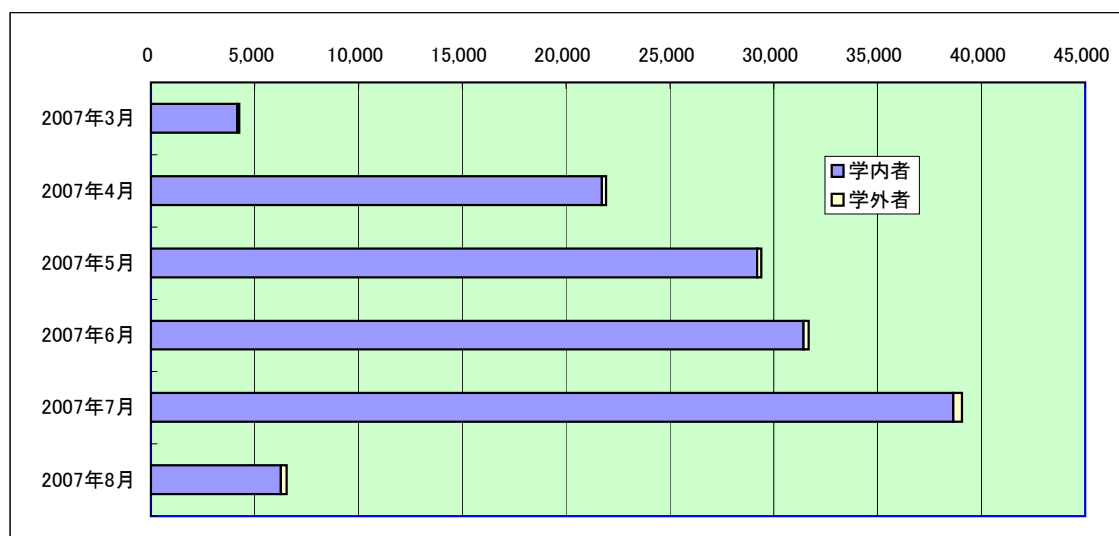
[お問い合わせ先] 附属図書館総務係 Tel:042-330-5193 e-mail:tosho-soumu@tufs.ac.jp

## ◆ 図書館活動日誌（平成19年4月～平成19年9月） ◆

- 4月 9日 入学式（館報「カスターリア」等配布）
- 4月11日 図書館オリエンテーション（全10回 ～4月24日）
- 4月20日 国立大学図書館協会東京地区協会総会 2名参加（於 電気通信大学）
- 5月 9日 利用者ガイダンス（全5回 ～5月15日）
- 5月23日 平成19年度第1回図書館委員会
- 5月29日 平成19年度情報リテラシー科目附属図書館担当「情報検索演習」（5月31日の計2日間）
- 5月30日 NII 目録システム講習会雑誌コース1名参加（於 国立情報学研究所 ～6月1日）
- 6月15日 「東京外国語大学学術成果コレクション」及び「VernaC」（多言語横断検索・入力支援システム公開開始
- 6月18日 情報検索ガイダンス（全5回 ～6月22日）
- 6月20日 平成19年度第1回選書委員会
- 6月20日 NII 目録システム講習会雑誌コース1名参加（於 国立情報学研究所 ～6月22日）
- 6月28日 第54回国立大学図書館協会総会 2名参加（於 福岡市）
- 7月 1日 リクエストガイダンス（～9月末日）
- 7月 2日 平成19年度大学図書館職員長期研修 1名参加（於 筑波大学 ～7月13日）
- 7月 3日 平成18年度CSI 委託事業報告交流会（コンテンツ系） 2名参加（於 千代田区）
- 7月25日 平成19年度第2回選書委員会
- 8月 1日 附属図書館ホームページ英語版公開
- 8月29日 NII 目録システム講習会図書コース1名参加（於 国立情報学研究所 ～8月31日）

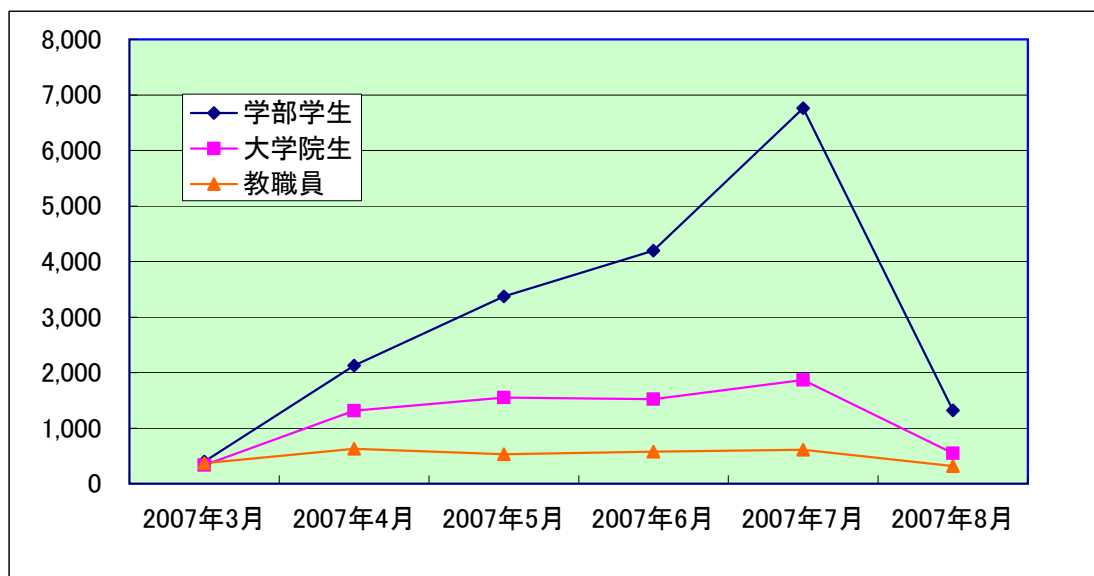
# 図 書 館 統 計

## 月 別 入 館 者 数 統 計



	2007年3月	2007年4月	2007年5月	2007年6月	2007年7月	2007年8月
学内者	4,165	21,714	29,197	31,436	38,644	6,261
学外者	105	216	219	259	434	297
合計	4,270	21,930	29,416	31,695	39,078	6,558

## 貸 出 冊 数 統 計



	2007年3月	2007年4月	2007年5月	2007年6月	2007年7月	2007年8月
学部学生	399	2,126	3,372	4,197	6,759	1,319
大学院生	335	1,317	1,548	1,520	1,870	550
教職員	366	630	531	574	612	315
合計	1,100	4,073	5,451	6,291	9,241	2,184

## 編 集 後 記

- 当図書館では、資料の多くが開架スペースに配架されています。この環境を十分に活用してください。コンピュータの検索データに頼るだけでなく、時間に余裕のある時には直接書架に行き、いろいろな資料に接してみてください。思いがけない資料との出会いや発見があると思います。(須郷)
- 秋です。秋といえば、食欲・スポーツ・そしてなにより読書の季節です。秋の夜長を図書館で読書三昧にひたるのも、学生時代ならではの過ごし方かもしれません。普段読まないような大作を読んでみてはいかがでしょうか。(斉藤)
- 今年度から時間外開館業務を外部委託しています。委託については、百家争鳴状態ですが、他の図書館でも働いている方と接し、思いがけず当館の独自性を再認識することになりました。まさか多言語 OPAC でびっくりされるとは…。(千葉)
- 活字メディアに加えてインターネットの時代となりました。居ながらにして膨大な情報に接することができるようになり、一昔前では考えられなかった便利さを享受していますが、情報を選別する力がますます問われていると感じます。(吉田)
- この7月に他大学から転任しました。非常に多くの言語の資料が書架に並べてあるのを見て驚き、新たに受け入れているすべての言語の図書の目録情報が OPAC で検索できると聞いて2度驚きました。言語の多様性を実感しています。(大澤)

Castalia：東京外国語大学附属図書館報 第14号：インターネット版 第7号

<http://www.tufs.ac.jp/common/library/gaiyo/kanpo/kanpo-j.html>

2007年9月30日発行

発行：東京外国語大学附属図書館

〒183-8534

東京都府中市朝日町 3-11-1

TEL/FAX：042-330-5193 (TEL)

042-330-5199 (FAX)

ホームページ：

<http://www.tufs.ac.jp/common/library/index-j.html>

編集発行人 木村 優

編集長 大澤 正男

編集委員 須郷 知子

斉藤眞一郎

千葉亜紀子

吉田 恵理

